Title	「東日本大震災国際神学シンポジウム」と発表論文について
Author(s)	藤原, 淳賀東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, -No.54, 2013.2 : 59-66
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4732
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「東日本大震災国際神学シンポジウム」と発表論文について

藤　原　淳　賀（聖学院大学総合研究所教授）
東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会

この聖学院大学総合研究所紀要五四号は、東日本大震災国際神学シンポジウム「いかにしてもう一度立ち上がるか――これからの一〇〇年を見据えて」（二〇一二年三月二三日）で発表された論文を収めている。[1]

この国際神学シンポジウムが行われるに至った経緯を記しておきたい。

東日本大震災からまだ日も浅い二〇一一年四月、フラー神学校（Fuller Theological Seminary）では、学長委員会において、東日本大震災で被災した日本の教会に何らかの支援を行うということが決定された。具体的な支援の内容に関しては、日本人の在学生、卒業生に相談した上で決めるということになり、彼らを通して私のところにも相談があった。

当時は泥かき等の奉仕者も多く被災地で必要とされていた。学生のボランティアを送ってもらうことも考えた。しかしフラーは神学校である。教会に仕えるという姿勢を明確にしている神学校でなければできない貢献をしていただくべきだと考え、神学シンポジウムを行うことを提案した。それが受け入れられ、この国際シンポジウムに結実した。

大震災直後から様々な支援の働きが行われていた。人々は被災地のために献身的に動いた。キリスト教界の震災への反応も早かった。しかしそのような支援は時とともに減少していく。そしてキリスト教関係では、その後も被災地にずっと残っていくのは教会である。もちろんミッション・スクールやキリスト教諸団体もあるが、まず教会がしっかりと建て上げられなければならない。

私は、パーパス・ドリブン・フェローシップ・ジャパンという超教派の教会指導者のための働きやローザンヌ運動という福音派キリスト教の世界宣教の運動に関わっていたこともあり、震災直後から諸団体のネットワーキングや支援の働きに関わることができ、また多くの情報が入ってきていた。[2] 諸教派、諸教団が今までの枠を越えて様々な支援を懸命に行ってきていた。

われわれは、千年に一度といわれる規模の地震と津波を経験した。安全だといわれてきた原子力発電所が爆発した。これが特殊な「時（καιρός カイロス）」であることは多くの人が直感的に理解していた。この「カイロス（時）」を神学的に捉え、何よりも諸教会の助けとなるような国際神学シンポジウムを行わなければならないと考えた。

「いかにしてもう一度立ち上がるか」。大震災で激しく傷んだ日本と日本の諸教会がいかにしてもう一度立ち上がることができるのかを、またいかに立ち上がるべきかを、神学的に考察する必要があると考えた。さらにそれは被災地の教会への助けとなるだけでなく、被災地を含んだ日本の諸教会が、また諸教派が、神が今ここにおいてなさっておられることを見、その神の働きに参与することができるようなきっかけとなる会とすべきだと考えた。そしてそのことを通し、海外のの諸教会と協力し、神の国の前進となるような会とすべきだと考えた。神は既に働いておられる。だからわれわれは神の働きに応答しなければならない（H・リチャード・ニーバー）。神の贖いの働きに参与しなければならない（ティリッヒ）。そのように考えた。さらには、「カイロス」の感覚を研ぎ澄ませていく中で、日本のキリスト教のた

めに、また日本のために大きなビジョンの必要性を痛感した。小さく、被災地の教会堂の修理・移転への対応をするだけでなく、現状を見据え、今までの日本宣教全体を振り返り、これから一〇〇年後にどのような状況になっていたいと神に求めるのか、神はこれからの一〇〇年の日本のキリスト教会に何を願っておられるのかを求め、分かち合う時と場が必要であると考えた。

日本におけるキリスト教は決して大きくはない。いや日本のキリスト者は僅か人口の一％以下である。しかしその一％の中に日本のキリスト教は様々な壁を作ってきた。教派の壁、伝統の壁だけでなく、利害関係からくる壁、自分の好みから作った壁、つまらないプライドから作ってしまった壁もある。しかしこの大地震は地の基と共にそれらの壁をも揺り動かした。それらの壁を越えた協力が起こっていた。これはプロテスタント諸教会も、カトリック教会も経験したことである。さらに九九％の日本人から見れば自分たちは「キリスト教」あるいは「キリストさん」なのだということも、震災後の支援の中で教会は経験していた。しかしこのような壁を越えた働きは、明確な意志とストラテジーを持って支えていかなければと、時とともに消滅していく。この「カイロス（時）」を捉えなければならないと考えた。学者たちが専門家のための議論をするのでなく、日本のキリスト教会のために、一般の人々が分かる言葉で、この大震災をどう捉え、神が何をしておられるのかを神の民として考察し、語らなければならない。さらに、主流派の教会と福音派の教会が協力しなければならない。

フラー神学校から正式に連絡が来たとき、何人かの人に相談した上で、私はこの企画を、実際の支援に広く関わっている東日本大震災救援キリスト者連絡会（DRCnet）に持って行った。また東京基督教大学（TCU）と聖学院大学総合研究所に持って行った。TCUと聖学院が、DRCnetと共に主催することで、福音派と主流派が肩を組んで大震災を経験した日本と日本のキリスト教のために共に前に進むというメッセージを発することができるからである。快諾してくださった、中台孝雄会長、榊原寛副会長をはじめとするDRCnet実務委員会、倉沢正則東京基督教大学学長、山口陽

一東京基督神学校校長、赤江弘之東京キリスト教学園理事長、大木英夫聖学院大学総合研究所所長に心から感謝したい。また阿久戸光晴聖学院大学学長、小倉義明キリスト教センター所長がこの働きを支えてくださったことに深く感謝している。東日本大震災神学シンポジウム実行委員会として、中台孝雄先生、榊原寛先生、高橋和義DRCnet事務局長、品川謙一日本福音同盟総主事、伊藤天雄東京基督教大学事務局長、山本俊明聖学院大学事務局長、そして私が仕えさせていただいた。

神の民が集まる時、祈りと賛美をもって始まり、祈りと賛美をもって終わるのが適切である。オペラ歌手の稲垣俊也東京基督教大学講師が山内吏奈東京中央バプテスト教会音楽主事と共に賛美を担当してくださった。またフラー神学校と日本との重要な橋渡しの役割を果たしてくださったのは、フラーの教授たちが何度も会議の中で言及されていたように、フラーの卒業生である一場茉莉子恵約宣教伝道所伝道師であった。

フラー神学校は優れた宣教学の伝統を持つ神学校であり、現在世界で最も大きな神学校である。フラーは、アメリカの神学校が被災国に出かけていき、何かを教えようとするというかたちにならないように、細心の注意を払っていた。シンポジウムの中心は、あくまでも日本の教会指導者であり、フラーは日本の教会に仕え、励ますことを目的とするということを確認して来られた。教授を送り、できうる神学的貢献をし、献金を送り、手弁当で日本の教会に仕えるという姿勢で来られた。このことを明記し深く感謝を表したい。

フラー神学校にはグレン・スタッセン教授を送ってくれるようにお願いした。彼とは既知の間柄であり、彼がかつて放射線の研究をしていたこともあり福島の問題にも大変に敏感な社会倫理学者であることを知っていた。さらに彼の父ヘラルド・スタッセンはミネソタ州知事を務め、また国際連合の設立に深く関わった政治家である。大統領選にも何度も出馬している。第二次世界大戦直後の日本を見、復員した父からスタッセン教授は広島、長崎のことを含め戦争の悲惨さをよく聞いていた。スタッセン教授は神学的考察を常に実践と関係付けて考える。ユニオン神学校でラインホール

ド・ニーバーのもとで学び、かつ教派を超えた平和主義の実践を主張する、日本のキリスト教会が注目すべき倫理学者である。またフラーには、キリスト教史の中で大災害が起こった時、教会がどのように対処してきたのか、その歴史的考察をお願いした。ホアン・マルティネス教授がその労を取ってくださったことに感謝している。マルティネス教授は異文化国際プログラム学務担当副部長でもあり、フラーにおいて今回のような対外的な働きの中核の責任を担っておられる。スカイプで対話をし、今回の会の準備を共に進めてきた。フラーからはもう一人、メアリー・ギブン准副学長が一緒に来日された。山口陽一教授には、日本キリスト教史の観点からこの東日本大震災をいかに見るべきかという考察をお願いした。歴史家の鋭い視点をもって、カトリック宣教によるキリシタン時代も含めた日本キリスト教史における東北について、またハリストス正教会にも深い注意を払いつつ、論じてくださった。そして東日本大震災を通して考えるべき問題を提示されている。重要なテーマでありながらあまり考察されてこなかったこれらの問題に山口教授は光を当ててくださった。大木英夫教授は、プロテスタント教会が一六世紀におけるその成立以来、様々な教派に分かれ続けてきたことの問題を深く認識しておられた。日本のキリスト教は、一九世紀の開国と共に始まった宣教直後は公会的性格を持っていたのだが、次第にそれを失っていった。この悲惨な大震災を通して日本のキリスト教がその分裂的性質を越えていく道を提示することができるならば、世界のキリスト教に対しての貢献となるということを震災直後から語っておられた。これらの講演以外にも、被災地現地から森谷正志先生（仙台バプテスト神学校校長）が支援の働きと宣教は大きく重なっているということを現地での働きの実感を込めて報告してくださった。

国際神学シンポジウムの予算は全くないところから始めた。しかしフラーが手弁当で来てくれるので、日本側の関係者にも皆、手弁当でお願いした。皆この意義を理解してくださり、快諾してくださった。知り合いの方々を中心に協賛（献金有）・後援（献金無）をお願いした。主催・共催を含めて、計二九団体がこの国際神学シンポジウムを支えてくだ

さった。個人的な献金を捧げてくださった方もおられる。心から感謝したい。

私たちが願ったことは、国際神学シンポジウムを行うことだけではなかった。神の国のために、日本のキリスト教のために、壁を越えた交わりが広がっていくことを願っていた。シンポジウムを機として今まで顔を合わすことがなかった諸団体のリーダーたちが繋がっていくことを願っていた。共に神の民として神の国の前進のためにできる協力を一緒にし、会議で同席するだけでなく、お茶を飲み、食事を共にし、ビジョンを分かち合うような関係が進むことを願っていた。

そのためにこのシンポジウムの直後に、主催・共催・協賛・後援団体の指導者たちで会食の時を持った。その後も定期的にそれらの団体の代表者会を持ち、ニーズや意見を聞きながら第二回東日本大震災国際神学シンポジウムの準備をしてきた。また「東日本大震災神学研究会『大震災を通して日本を神学する――Vision & Connection through Theological Investigations――』」を始めた。大震災という激しい裂け目を通して日本の問題と日本のキリスト教の問題を神学的に考察しつつ、それらを通して大きなビジョンと指導者たちの繋がりが生まれてきている。

フラー神学校が触媒となって、少しずつ、かつて全く交わりのなかった人々や団体が共に働きができるようになってきている。この震災後の日本において、これからも様々な協力関係が進められていって欲しいと願っている。できる事は一緒にする。一緒にできなくても連絡が行き、顔が繋がり、互いに敬意を払い、互いを建て上げる関係が発展していって欲しいと願っている。

これからも様々な報告会やシンポジウムやディスカッションが行われていくであろう。私たちはこの国際シンポジウムに最善を尽くしている。第二回、第三回の準備も進めている。しかしこのシンポジウムよりももっと素晴らしく、そして暖かく、励ましとなるようなものがたくさん出てきて欲しい。それらの試みを心から支持したい。それらが壁を越え、神が何をなさろうとしておられるのか、という意識の中で進められていくことを心から願っている。その中でキリ

スト教会、キリスト教諸団体、神学校、ミッション・スクールの協力関係が進んでいくことを願っている。私たちが共に、神を愛し、この国において隣人を愛し仕える歩みを進めていくことができるように願っている。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。

（ヨハネ一三：三四―三五）

（肩書きはすべて東日本大震災国際神学シンポジウム当時）

注

（1）この国際神学シンポジウムは二〇一二年三月二三日女子聖学院クローソン・ホールにて持たれた。

（2）パーパス・ドリブン・フェローシップ・ジャパンでは震災直後の二〇一一年三月二二日「災害支援キリスト者情報交換会（Disaster Relief Christian Information Exchange）」を持った。二七団体から一三〇名の参加があった。またその後、同年四月一三―一六日、東京と名古屋において災害カウンセリング・セミナー「災害に襲われたときいかに人々に寄り添えるか（How you can help others when disaster strikes）」を米国サドルバック教会の協力で開催した（東日本大震災救援キリスト者連絡会［DRCnet］後援、名古屋では東海福音フェローシップと名古屋キリスト教協議会との共催）。さらに同年六月二七―二九日（山形）、八月一七―一九日（福島）、八月二二―二四日（岩手）、三月二六―二八日（山形）に「東日本大震災で

被災された地域の牧師と家族のための被災した教会の牧会者セミナー」を行った。聖学院大学総合研究所の同僚、藤掛明先生の温かい協力があったことを記しておきたい。